

郷土文化財紹介

伝説と昔話シリーズ

<宮方伝説>

《その背景》

木曾川の西側に、今は「木曾西古道」と言われる古道があり、川辺、八百津、久田美、福地、中ノ方、蛭川、高山、福岡、坂下、田立を経て木曾へと入っていきます。

応仁の乱が終わり60年ほど経った天文2年(1532年)、京都醍醐寺理性院の厳助僧正が伊那の文永寺へ血脈灌頂の儀式に出向く折に、この古道を辿り坂下樵楽山西方寺に逗留しました。また江戸中期、三留野の神官園原旧富はこの古道を歩いて京都へ遊学しています。

さてこの地方の宮方伝承ですが、これも中野方、毛呂窪、蛭川、高山、上野、川上、坂下、田立と木曾西古道に沿って伝えられており、各地にゆかりの字名や石造物が残ってきて各町村史の中でも項目を起し述べられています。



宮方とは、時の後醍醐天皇が北条一族による鎌倉幕府に不満を持ち有力御家人へ倒幕の勅を発したことを一つの切っ掛けとして新田義貞、足利高氏等が反旗をひるがえし北条氏を亡ぼし建武の新政が始まるのですが、高氏(尊氏)が離反し新しい天皇(後伏見天皇の親王)を立て足利幕府を京に興したことで後醍醐天皇は吉野に逃れ足利幕

府と対峙する事になり、この吉野の天皇方のことで南朝ともいわれます。足利幕府方を武家方または北朝といい、この両者の対立は全国的に諸々の争いを生み1336年から1392年までの57年間続き騒乱の南北朝時代と言われます。一方で経済的には農業、商工業が発達し人々の移動も活発となり、貨幣経済がずいぶんと発展したようです。

私たちの地域は美濃国恵那郡遠山荘苗木郷で遠山苗木氏が領していた。武家方の土岐氏が美濃国の守護で、遠山岩村氏、遠山明智氏、遠山苗木氏はその下におり、武家方として働いていました。土岐氏は美濃、尾張、伊勢の三国の守護となり武家方の筆頭にまでなるも内紛があり遠山苗木氏は戦死者をだし翻弄されます。土岐氏は二分され一方は尾張国守護、片方は美濃国守護となり遠山苗木氏は奉公衆すなわち足利將軍の直属守備隊に組み込まれました。

→土岐康行画像
美濃、尾張、伊勢の三国守護として足利幕府内でその筆頭にまで上り詰めるが、氏族内紛を突かれて二分され力を削がれた。
(画像はウキペディアより)



後醍醐天皇には16人の親王がおり彼らに天皇を継がせようとするわけで、懐良(かねよし)親王を鎮西として九州へ下らせ、義良(のりよし)親王を奥州へ、恒良(つねよし)親王には新田義貞を付けて北陸へ、宗良(むねよし)親王は遠江へ下ります。各地で勢力を広げることが願ったのであるが、たやすくはなかった。各地で武家方に攻められ恒良親王と義貞は北陸で討ち死にし、義良親王と宗良親王は京都へ攻め上るも敗走することとなる。吉野へどうにかたどり着き義良親王が後醍醐の後を継ぎ後村上天皇となった。宗良親王は

遠江へ還った。この後、信濃国大河原へ本拠地を移した宗良親王は信濃宮と呼ばれるようになった。

この乱世の中でも宗良親王は歌人として名を成していた。南北朝動乱時代、官方君臣等の和歌を集めた准勅撰和歌集「新葉和歌集」と私家集「李花集」を編んでいる。蛭川村史に、それらの中に神坂峠や木曾のことを詠んだ歌があると記される。宗良親王の歌として以下三首が上げている。

稀にまつ都のつても絶えぬとや
木曾の神坂を雪うずむなり
思いやれ木曾の神坂も雲とずる
山のこなたの五月雨のそら
木曾路川うずまく瀬々の浪ならば
行きめぐりして立ちかえらまし

このことから宗良親王が神坂峠を越え、木曾川の河畔に立たれたことを物語るとしています。

《宗良親王伝説》

この地域中野方、蛭川、高山、上野、川上、坂下の官方伝承であるが、武家方に追われての逃避行です。武家方による官方への対処は、尊氏は「義貞が一類亡ぼして向後の云々」と考えていたとあり、ときには義満のように懐柔策を取ったようです。また厳しく「南朝一統断絶さるべし云々」と臨んでいるので、かなり厳しく追跡されていたであろうと思われます。恩賞目当てでそれに関わった者もいたであろうと思われます。その逃避行には3通りの伝承があり、一つは宗良(むねよし)親王に関する伝承、二つ目は宗良親王の御子尹良(ゆきよし、ただなが)親王に関わる伝承、三つ目は彼らの忠臣に関する伝承です。以下に記す内容は、蛭川村史、福岡村史、恵那市史を参考にさせていただきました。

中野方の伝承は笠置山に関わるものです。京都府の南方、山城国相楽郡(さगरかごおり)笠置にも笠置山があり後醍醐天皇が鎌倉幕府倒幕の乱を起こしたところで、この時は失敗し隠岐の島へ流されてし

推測すると宮は信濃を離れ雪の残る神坂峠を越えられ、五月雨の頃木曾川の右岸地域に立ち雲に閉ざされた神坂峠や渦巻き行き来する木曾川の流れを静かに眺め、絶えてしまった吉野からの便りのことを思っているのでしょうか。さみしさを感じさせる歌である。「新葉和歌集」を編んだ後、宗良親王は信濃に帰ったとあるが、其の後の宮の消息は分らないとされています。

<参考書籍> 日本史図録(山川出版)、南北朝(朝日新書)、南朝全史(講談社学術文庫)、闇の歴史、後南朝(角川ソフィヤ文庫)、遠山友政公記(苗木遠山史料館)、美濃源氏土岐氏の歴史と文化(パンフ)、近隣の市町村史など。

まいます。どちらの笠置山も巨岩巨石があり山の形もよく似ているようで、そのようなことから宮が笠置山を参詣したという伝承があるとされています。



↑中津川市恵下から笠置山を望む。神坂峠を越え下ってきた宗良親王は、笠置山を目にし父後醍醐天皇のことを偲んだのでしょうか。

蛭川の宗良親王伝承は、南朝方の忠臣和田某が蛭川に逃れて来て定住し、彼はこの地の良さを親王にしらせていたが病没してしまいました。その後信濃大河原から親王が神坂峠を越して蛭川にやってきました。このときの従者を四家といいこの地方に土着したと記されます。



↑福岡高山地区から恵那山、神坂峠を望む。写真山並みの一番低いところが神坂峠か。

宗良親王歌

思いやれ木曾の神坂を雲とずる
山のこなたの五月雨のそら

坂下の宗良親王伝承は、握聖鑑坊の大きな石柱と共に残されています。以下の話は握の古老より聞いたものです。

武家方により信濃大河原を追われた宗良親王は、恵那市の方面に逃れ木曾川を渡り中野方に至るも落ち着く間もなく蛭川、福岡へと追い立てられた。鎮野峠を越えようやく字坂裾(さかんそ)に隠れて一時を過ごした。ここより中原に上り下れば坂下の集落で田立を経て木曾に逃れることができま

《尹良親王伝説》

尹良(ゆきよし、まさなが)親王の伝説は坂下にもありますが、蛭川、高山、川上の伝説と繋がっていて坂下単独で記すと単純になってしまいます。そこで蛭川から順に話を進めさせてもらいます。蛭川村史、福岡町史、川上村史、坂下町史、恵那市史を参考にしました。

蛭川の伝説は、木曾三留野(みどの)の神官菌原旧富(そのはらふるとみ)が書いた「木曾古道記」に「伝エテ云フ、後醍醐帝ノ王子住シ給ヒ、大和ナル笠置ノ神ヲ勧進ナサレ、御登山アリテ御祈願アリケルト云フ、内裏・御所平ノ跡顕然トシテ久シカラズ見ユ、陶器・家具類今モ多ク掘り出ス」と記されるとし、すでに江戸時代にはあったとするとところから始まります。

す。かつて木曾路は通った所でした。突如追っ手は上からあらわれ外川に沿い下へ追いやられてしまいます。やっとのこと握の峠にたどり着きますが、力尽き武家方に絡め取られ落命したと伝えています。聖鑑坊の石柱は宗良親王を悼み鎮魂するものとされて守られてきました。



←聖鑑坊の石柱
高さ210cm、幅70cmの形の良い石柱
である。宗良親王に関わる石柱とされるが、今は峠の塞ノ神として祀られてきている。

蛭川では、明治の中頃より郷土篤志家等が伝説の遺跡を顕彰、調査を続けていました。大正12年に鎌倉建長寺末寺から蛭川に来ていた僧侶が「むかし建長寺大和尚が蛭川に赴き法会を行ったという建長寺古記録を見た」と話されたことから、建長寺古記録調査を村が熱望し建長寺の担当者今井某の協力を得て進められました。また、村は史跡調査委員を任命10年ほどに亘り駿河や信濃各地の伝説も調査され、「蛭川史跡伝説集」として編集しガリ版刷りで発行、各戸に配布しました。残念ながら確たる証を得ることができなかつたと蛭川村史は記しています。

その後、蛭川村では南朝神社を再建し伝説を大切にしていこうとしているともありました。



↑ 南朝神社（白山神社の脇）

浪合村大河原を逃れた尹良（ゆきよし、まさなが）親王は、笈（おい）を背負った田舎山伏にふんし逸見某なる従士一人に守られ、美濃国大井の里まで落ち延びます。眼前に見える山が笠置山と聞き、今は亡き祖父醍醐天皇の笠置山を思いこの地を目指します。笠置山を詣でてから麓の松尾寺に隠棲し里人らとも交わり、以前からこの地に土着していた官方忠臣和田某と出会います。その娘を妃（きさき）としました。浪合村大河原の生き残りたちも少しずつ集まり、農業などして力を増していった。もともこの地は武家方遠山苗木氏の治めるところであり、勢力が目に着きだせばすぐに攻められることとなります。宇棚杭（とちくい）で戦いがあり49人の従士等が亡くなり、宮も自刃したとされます。山口神社に残る宝篋印塔と五輪塔はその墓ではないかと考えられています。このようにして蛭川村の伝承ができ、親王塚、殿塚、姫塚などの遺跡や内裏などの字名を残してきました。



↑ 中津川市指定文化財となっている親王塚

続いて高山や坂下、川上の伝説が始まりますが、蛭川を追われた尹良親王は木曾路へ逃れようと高山の関屋（せきや）に到着しました。

武家方は「南朝一統断絶さるべし云々」であるから、追跡は厳しく関屋で合戦となりました。従士今嶺某等が奮戦するも武家方の戦力を跳ね返すことはできなせん。大円坊に妃を頼み少なくなった従士と共に木曾路を目指すこととなります。



↑ 高山地区の宇関屋から高峯山を望む。この山を越えれば坂下には真言密教の三井寺があり、木曾へのてがかりが得られるやも知れない。

福岡を経て外洞に至り長坂を下って矢淵へと落ち延びてきました。川上川を越えればそこには真言密教の金龍山三井寺がありました。ここに少し休み傷を癒やすことができれば、木曾路は目の前であり以前父宗良親王と通ったところですが、武家方は三井寺側から合戦を挑んでき、矢淵の戦いとなりました。今嶺某らはここの激戦で戦死し、従士は千葉、糸川、竹越、逸見等数名になってしまいます。彼らと共に矢淵から上流へ押しやられ川上の奥地から田立へと向かおうとします。宇御所根（御所寝）と言われる川上、田立境で尹良親王は「もはやこれまで」と自ら命を絶ってしまわれました。残された千葉某、糸川某、竹越某、逸見某等は再興を願い、千葉某は川上に、竹越某は上野へ、逸見某は毛呂窪に身を隠し、糸川某は宮の御首（みしるし）を隠し持ち高山大円坊へ戻ります。ここに隠れ居られた妃もすでに亡く、後に殿垣戸（とのがいと）といわれる地に埋葬し宮と妃の冥福

を祈ったと「高山郷土読本」は語っています。

坂下では「刀研ぎ石」、「落ち武者の碑」、「矢淵」、「旗巻き」、「やりかん田(槍嚙だ)」の遺石や字名が残ってきました。



↑ 刀研ぎ石（長坂古道の脇にある。）



↑ 落ち武者の碑（大門と時鐘の堺にある）

高山では殿塚「姫塚」「十三塚」「大円坊」「関屋」「御所平」等の塚や遺跡や字名が伝えられています。



↑ 上の写真は殿塚の宝篋印塔と五輪塔。下の写真は姫塚の宝篋印塔。2つの塚は字殿垣戸に200mほど離れて立つ。
いずれも中津川市指定文化財。

《宮方忠臣等の伝説》

鎌倉時代末、南北朝時代から室町時代にかけては争いが絶えない時代でした。争いは人の移動を伴います。他の国から移動し美濃国に土着した人達がいたのではないでし

ようか。宗良親王、尹良親王に従い名の出てきた忠臣等について、不確かな点があると思われるが、その出身地を調べてみました。

和田某は上野(こうずけ)和田氏に繋がり

